ワシントン・スクエア

Washington Square

by

Henry James

ヘンリー・ジェイムズ

訳 河島弘美

キネマ旬報社

ワシントン・スクエア

Washington Square
by Henry James

ヘンリー・ジェームズ
訳 河島弘美

江苏工业学院图书馆
藏书章

キネマ旬報社

訳者紹介
河島　弘美（かわしま・ひろみ）
1951年、東京生まれ。
東京大学大学院修士課程（比較文学比較文化）修了。
現在、東洋学園大学人文学部教授。訳書に、『ラフカディオ・ハーン著作集第一巻アメリカ雑録』（共訳、恒文社）、『小泉八雲名作選集』（共訳、講談社）、アマンダ・クロス『精神分析殺人事件』（三省堂）、スー・ハリソン『母なる大地　父なる空』（晶文社）ほか。

ワシントン・スクエア

1997年3月1日　初版発行

著　者―――ヘンリー・ジェイムズ
訳　者―――河島　弘美
発行者―――竹内　正年
発行所―――株式会社キネマ旬報社
〒112　東京都文京区小石川 1-21-14
電話　(03)3815-7131　FAX　(03)3815-7139
振替　東京 00100-0-182624
¥2000,-
印刷・製本―――図書印刷株式会社
© Hiromi Kawashima,1997
ISBN4-87376-197-2
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ワシントン・スクエア

ヘンリー・ジェイムズ　訳　河島弘美

Henry James

Washington Square

1880

装　幀———BRC

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

十九世紀前半、さらに詳しく言えばその後半のことだが、ニューヨークの町に一人の隆盛をきわめた開業医がいて、ふつう名医というものが受ける以上の、大きな敬意を集めていた。アメリカでは医者は常に立派な職業として尊重され、紳士階級だと自称する正当性を他のどこよりも獲得している。自分で働いて収入を得るか、得ているふりを装わなくては一人前とされないこの国で、医者は二つの信望の要素を見事に調和させることができる地位と言えよう。アメリカで高く推奨される実践という領域に立ちながら、同時に学問の様相も備えているからである。知識を愛するからと言って必ずしも機会やゆとりに恵まれるとは限らないことを考えれば、これは確かに評価すべき特典であった。

スローパー博士は、学問と技術の釣合がとれていると評判だった。いわば学者肌の医者だったが、治療は抽象的ではなく、必ず具体的な処方があった。徹底を好む人という印象だが、いやになるほど理論派というわけでもない。患者に対して、必要と思われる以上の詳細な説明をすることも時としてあったが、一部の開業医のように説明だけで終わりとはせず、むずかしく書かれた処方せんも必ず出すのだった。中には逆に、一言の説明もなしに処方せんだけ残していく、乱暴な開業医もいたが、スローパー博士はもちろんこのタイプにも属してはいなかった。つまり博士は賢い人物で、ニューヨークの名士になれたのも、まさにそのためだったのである。

当時スローパー博士は五十歳前後で、人望も頂点に達した時期にあたっていた。機知に富み、ニューヨークの上流社交界では世慣れた人として通っていたが、実際そのとおりだった。誤解のないように急いでつけ加えておくが、博士は絶対に山師などではなかった。それどころか、どこまで正直かを計る機

会がこれまでなかったほど正直な人間だった。周囲の人たちは、自分たちがアメリカ一の名医を擁しているのだと自慢して楽しんでいたが、それを別にしても、博士は実際に日々の診療において、名医の評判を実証してみせていた。冷静な観察眼を備え、自然のままで十分に聡明な人だから、二流の人間のように体裁をつくろったり、ごまかしたりする必要など先生には少しもないのだ、と人々は言い合った。運命までが博士の味方をして、繁栄への道を楽々と歩めるように導いてくれたことも忘れてはならない。博士は二十七歳の時に恋愛結婚をした。相手はニューヨーク生まれの、キャサリン・ハリントンという、とても魅力的な令嬢で、その魅力に加えてかなりの資産を持参金としてもたらしてくれた。スローパー夫人となった彼女は、教養があって気立てもよく、優雅で上品な女性だった。一八二〇年当時のニューヨークは、将来有望な首都とはいえ、草深いカナルストリートを北の境とし、湾を見おろすバッテリー公園のあたりにまとまった小さな町だったが、そのニューヨークでも屈指の美人だった。オースティン・スローパーは、二十七歳の若さではあったが、既に名を成していたので、一万ドルの年収とマンハッタン島一の魅惑的な目をもった若い上流婦人に多くの求婚者の中から選ばれたのも、驚くにはあたらないと人々に思わせるだけのことはあった。美しい目だけでなく、ほかにも魅力のある妻の存在に、若い博士は心から満足し、妻を愛する幸せな夫として、約五年の月日が過ぎた。

裕福な妻を迎えたからといって、それまでの博士の方針には何の変わりもなかった。父の死によって兄弟姉妹と共に相続した、わずかな遺産以外に何の資産もないかのように、博士は一つの明確な意図をもって医学に専念し続けた。その意図とは、金もうけではなく、何かを学び、何かを行なうということだった。何か興味深い事柄を学び、何か有益なことをする――大まかに言えばこれが博士の人生計画であり、たまたま妻に収入があるからといって、その計画に変更の必要性があるとは思えなかったのである。医者として診療に腕をふるうことは大きな喜びであり、医者以外の職業につく自分の姿はとうてい

想像もつかないほどだったので、博士はあくまでも医師――それも最良の医師でいようとしたのだった。とはいえ、恵まれた家庭環境のおかげで、単純労働の多くを肩代わりしてもらうことができたのは、言うまでもない。上流階級と交際の多い妻のおかげで、そのような患者もふえた。中流以下の人々の症状と比較して、より興味深いとは言えないにしても、そういった患者たちには共通点も見られた。博士は経験を積みたいと願っていたが、その願いは二十年の間に十分かなえられた。ただし、その経験の中には、本質的な価値はさておき、必ずしも喜ばしくない種類のものもあった。博士の第一子は、めったに物事に熱中しない性格の博士でさえ、並はずれて将来が有望だと信じたほどの男の子だったのだが、わずか三歳の時に、母親の手厚い看護と父親の医術を尽くした甲斐もなく、他界してしまったのだ。二年後に生まれた次の子供は女の子で、そのためにその子は博士からは、必ずや立派な男に育て上げると心に誓いながら惜しくも亡くした長男のかわりとしては意に沿わぬものとして迎えられた。女児の誕生は失望のもとだったが、さらに悪いことが続いた。産後の経過は順調だった夫人の容態が一週間後に急変し、次の週のうちに亡くなってしまったのである。

人命を助けることを天職とする博士にしては、自分の家庭で思わぬ失策をしたと言われても仕方なかった。名医と呼ばれながら、わずか三年のうちに妻と息子を死なせたとあれば、医術か愛情か、どちらかの不足を非難されてもやむを得なかったであろう。ところが博士は非難を受けなかった。もっともそれは、他人からの非難という面に限ってのことである。自責の念こそ、最も強力で恐ろしいもので、博士は生涯これを心の重荷として背負い、妻を亡くした夜に負った深い傷の傷跡はついに癒えることのないままに生き続ける運命だった。すでに述べたように、世間は博士に対して評価を変えず、皮肉どころか同情を寄せた。不幸にあったおかげで、博士はそれまで以上に人々の興味と人気を集める結果となった。医者の家族でさえ助からないほど、油断のならぬ病気もあるのだ、という事実を人々は認め、博士

の妻や息子より前に亡くなった患者も、それに並ぶ例としてみればあきらめもつく、と考えられたのだ。博士の手元には娘が残された。期待はずれではあるが我慢しよう、と博士は心を決めた。博士に備わっていた権威が、初期の子育てに役立った。娘は、当然のこととして、亡き母の名をとってキャサリンと名付けられ、ごく小さな赤ん坊時代から一貫して、博士は娘のことをキャサリンという名前でしか呼ばなかった。キャサリンは、健康で丈夫な子に育った。娘を見るにつけて博士は、この様子なら少なくともこの子をなくす心配だけはないだろう、と心に思ったものだった。この様子なら、と思ったわけについては、これからゆっくり述べていくことにしよう。

2

キャサリンが十歳になった頃のこと、スローパー博士は妹のペニマン夫人に、邸へ来て暮さないか、とすすめた。妹は二人いて、どちらも若くして結婚していた。下の妹はアーモンド夫人といって、富裕な商人の夫と賑やかな子供たちのいる家庭を築いていた。血色のよい、整った顔立ちで、道理をわきまえた、気持ちのよい婦人で、賢い兄のお気に入りの妹だった。博士は、たとえ身内であっても、女性の好き嫌いのはっきりした人なのだった。一方、もうひとりの妹ペニマン夫人は名前をラヴィニアといい、貧しい牧師と結婚した。この牧師は雄弁家だったが病弱な体質で、子供も財産ものこさずに、三十三歳のラヴィニアを置いて他界してしまった。華麗な弁舌の思い出と、ラヴィニア自身の話しぶりに漂う芳香のような気品だけが、残されたすべてだった。スローパー博士は、そんなラヴィニアを邸によんだ。するとラヴィニアは、十年の結婚生活を小さなポーキープシーの町で過ごしたあとだけに、喜んでその話にとびついた。博士としては、妹が手頃な貸し間を見つけるまでと思ってのことで、この先ずっと、というつもりではなかった。が、ラヴィニアが本当に探したかどうかはともかく、住まいが見つからなかったことだけは確かだった。ラヴィニアは博士の家にすっかり腰を落ちつけてしまい、キャサリンが二十歳になった時にも、彼女をとり巻く身近な人々の中に、ラヴィニア叔母さんの姿が見られたわけである。わたしは姪の面倒を見るためにこの家にとどまっているんですよ、というのが本人の説明で、兄の博士以外の人なら誰にでもそう言っていた。博士はといえば、説明なら自分でいくらでも考え出すことができるからと、人に説明を求めたためしのない人だったし、ペニマン夫人の方もなぜか兄の前では、日頃の自信たっぷりな態度はどこへやら、教えたがり屋の癖も出さないようにしていた。あまりユーモ

アのセンスに恵まれているとは言えない人だったが、この点には気をつけなくては、と思う程度の知恵はあったのだ。スローパー博士の方も、妹のおかれた情況では、かなり長期間にわたって自分に負担をかけるのもやむを得ない、と認めていた。それで、母親を亡くしたかわいそうな娘のそばには才気煥発な婦人がついていなくては、という、妹の暗黙の言い分を、これも暗黙のうちに承諾する形だった。暗黙にしか認められないのは、妹の知性の輝きに眩惑されたためしなど、博士は一度もなかったからである。およそ女性のもつ資質に眩惑された経験は、キャサリン・ハリントン嬢に恋をした時、ただ一度だけしかなかった。患者には女性も多かったが、異性である女性を、個人的には称賛崇拝しているわけではなかった。女性の複雑さは、それによって啓発されるというよりも好奇心をそそられるものだったし、博士の考える理性的な美しさを患者の女性たちの中に見出すことはほとんどなかったのだ。亡き妻は理性的な女性だったが、彼女の場合は素晴しい例外だった――博士が確信しているいくつかの信条の中でも、これはおそらく最もかたい信条だった。もちろん、この信念はやもめ暮しの解消にはほとんど役に立たず、むしろキャサリンの可能性やペニマン夫人の働きに対する評価に限界を設ける結果をもたらした。とにかく博士は、六ヵ月が過ぎた時点で、妹の永住を既成事実として受け入れた。そしてキャサリンの成長に従って、なるほど娘には女性の存在が必要なのだ、と悟ったのだった。ラヴィニアに対してスローパー博士は、堅苦しいくらいにあくまでも礼儀正しく、ラヴィニアが兄の怒ったのを見たこととといえば、今は亡き夫と神学上のことで議論していた時に、ただ一度あるだけだった。博士は、神学については言うまでもなく、何事についてもラヴィニアを相手に議論することはなかった。だからキャサリンに関する希望なども、はっきりした結論の形で言い渡すのをよしとしているのだった。

キャサリンが十二歳だった頃、スローパー博士が妹に言った。

「ラヴィニア、あの子を賢く育てておくれ。賢い女性になってほしいんだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それを聞いたペニマン夫人は、少し考えてから答えた。「まあ、オースティン兄さん。兄さんは善良なのより賢い方がいいと思われるの？」

「善良だからって何の役に立つかね？　賢くなければ何にもならないじゃないか」

こうはっきりと言われると、夫人には異議を唱える理由も見あたらなかった。何事にも適応できる、この素質こそわたしのとりえなんですもの、とでも考えたのかもしれなかった。

「もちろん、キャサリンには善良であってほしいと願っているよ」スローパー博士は翌日言った。「だが、賢さのせいで善良さが減るわけでもあるまい。あの子が悪くなる心配など、わたしはしていないんだ。悪意なんか、これっぽっちもまじらない性格だからね。『よきパンのように善良』とフランス人なら言うところだ。ただし、今から六年後に、善良だがどこにでもいるような娘では困る」

「何のおもしろみもない娘になっては困るとお思いなの？　ねえ、兄さん、パンに味を添えるバターの役目は、ほかならぬこのわたしがするのよ。ご心配いりませんわ」日頃キャサリンのピアノの稽古をみたり、ダンスの教室に付き添ったりして、姪のたしなみ教育は一手に引き受けたつもりのペニマン夫人は言った。ちなみにキャサリンは、ピアノの才はいくらか見られたが、ダンスでは残念ながら、あまりぱっとしないようだった。

ペニマン夫人はやせて背が高く、若い頃にはさぞかしと思わせる容貌の持ち主だった。軽い文学に趣味があり、上流風が大好きな、ごく気立てのよい女性だったが、愚かにも率直さに欠けるきらいがあった。空想や感傷にふけり、ちょっとした秘密をもつのを大いに好んだが、これまで秘密といっても、まるで腐った卵同様、何の役にも立たないものだったので、実害はなかった。隠すべきことが一つもないのだから、完全に正直とは言えない性格も、特に重大な影響を及ぼしはしないのだった。わたしに愛人がいたらいいのに――そうしたら偽名を使って手紙をやりとりするんだわ、とペニマン夫人は空想した

が、それ以上の親密さは決して思い浮かべられなかった。愛人のいたためしもない。しかし、観察の鋭い博士には、妹の気質がよくわかっていた。「キャサリンが十七くらいになったら、きっとラヴィニアはキャサリンの頭に、口ひげのある誰それさんがあなたに夢中よ、などという考えを吹き込もうとするだろう」と博士は思った。「だが、本当のはずはない。口ひげがあろうとなかろうと、キャサリンに恋をする青年がいるはずはないんだからな。それでもラヴィニアは、そんなことを思いついてキャサリンに話すだろうし、ひょっとして秘密好きの誘惑に抵抗できたとすれば、わたしの耳にまで入れるだろう。もっとも、キャサリンの心の平和のためには幸せなことに、キャサリン本人はそんなことを確かめようとも信じようともするまい。あの娘は夢想家ではないからな」

キャサリンは発育のよい、健康な子供だったが、母親の美しさはまったく受け継いでいなかった。醜いというわけではない。あまり器量がすぐれず、おとなしくてさえない顔つきだというだけのことだった。人からは、感じのよいお顔、と言われるのがせいぜいで、裕福な家の富を相続する一人娘ではあったが、美人だと思われたことはなかった。精神的な純粋さを信じる父親の考えは確かで、まさに、どこまでも善良な娘だった。素直で愛情深く、言いつけを守って、嘘をつくことは決してない。幼い頃はかなりのおてんば娘で、物語のヒロインの形容にはふさわしくないのを承知で言えば、大食家でもあった。私の知る限り、しまってあるレーズンをつまみ食いしたりすることはなかったようだが、お小遣いをクリームケーキにはたいていたのは事実だった。もっとも、この点に関してキャサリンに批判的な態度をとるのは、自分も身に覚えのある伝記作者にとって、矛盾した行為となってしまうだろう。キャサリンが賢いと言えないことは明白だった。本を読んでも、その他どんな方面にしても、のみこみが遅い。障害があるわけではなく、周囲の人たちと立派に会話をするだけの知識はなんとか身につけたが、そんな時にも常に脇役だった。ニューヨークでは若い娘が主役をつとめることも可能だというのは周知の事実

である。しかし、ひどく控えめなキャサリンには、そんなふうに人目に立ちたいという望みは少しもなく、社交の場では目立たない場所にそっと隠れているのだった。キャサリンは父親がとても好きで、同時に父親のことをとても恐れていた。父親は誰よりも頭がよく、ハンサムで、有名な人だと思っていた。父親への愛情には恐れの気持ちがまじっていたが、愛情は畏怖の念のために弱まりはせず、むしろ、キャサリン独特の趣が加わるようだった。キャサリンの心の、一番奥深い望みは父親を喜ばせることで、それができたとわかるのが、キャサリンにとっては幸福ということだった。その望みは、ある程度までしかかなわなかった。父親が優しくしてくれるにもかかわらず、キャサリンにはその限界がよくわかっており、そこを突破することこそが生きがいと思われたのだった。父親が自分に失望していることを――ほとんどあからさまにそういう意味の言葉を博士が口に出したことが、三、四回はあったにもかかわらず――キャサリンは知らなかった。何事もなく順調に育って十八歳になったが、賢い娘に育ててほしいというスローパー博士の希望に、ラヴィニアがこたえたとは言えなかった。博士は娘を自慢したかったのだろうが、かわいそうなキャサリンには、自慢すべき点がなかった。もちろん、恥ずべき点も一つもないのだが、誇りの高い博士にとって、それでは満足できなかった。並みはずれた娘をもつ喜びを求めていたからである。うちの娘なら、しとやかで美しく、気品と知性があって当然じゃないか。あれの母親は、生きていた頃には最高に魅力的な女性だったのだし、父親の自分だって、これでなかなか立派なものなんだからな。それなのに、二人の間にできた子供はあまりに平凡だ、といらだちを感じる時もあり、妻はこんな結果を知らずに早く亡くなって、むしろよかったのだと思うことさえあった。博士自身、事実を悟ったのは遅く、キャサリンが一人前になった時に初めて、動かし難い事実として受け入れる気持ちになったのだ。結論を急ぐ人ではなかったので、それまでは、もしやと思うことがあっても、よい方に解釈していた。キャサリンはとてもよい性質の娘よ、と妹のペニマン夫人からたびたび聞かさ

れていた博士は、その言葉をどう解釈すべきか承知していた。博士の考えではそれは、叔母の馬鹿さ加減を見抜くだけの知恵がなく、おかげで叔母の機嫌をそこねずにいるという、キャサリンの知力の限界を示すものだった。けれども、博士もペニマン夫人も、キャサリンの限界を誇大に考えすぎる傾向がないとは言えなかった。というのもキャサリンは、叔母が大好きで、感謝もしていたが、父親への称賛の念を特徴づけているような畏敬の気持ちを、叔母に対して抱いてはいなかった。キャサリンにとってペニマン夫人は、無限の広がりなどまったくなく、いわば一目で全体が見渡せる景色のようなもので、驚嘆することはなかった。一方、父の偉大な能力の方は、はるかかなたまでのびて、ぼんやりした光にとけ込んで消えているように思われた。しかも、そこで消えているのではなく、その先はキャサリンにはもう、見きわめもつかないのだ。

博士は失望を娘のせいにして当ったり、親の期待を裏切ったと悟らせたりすることはなかった。それどころか、娘を不当に扱っては、という恐れから、模範的とも言える熱意をもって義務を果たし、キャサリンが誠実で愛情深い子供だということも、すすんで認めた。それに博士は、冷静な達観者でもあったので、失望をかみしめながら葉巻をくゆらすことも一度や二度ではなかったはずだが、時がたって、その失望にも慣れてしまった。はじめから期待などかけてはいなかったんだ――おかしな理屈ではあったが、博士はそう考えることで自分を納得させようとした。「期待はまったくしていない。だから、驚くようなことをキャサリンがしてくれればもうけ物だし、だめでもともと、損はないわけだ」博士が自分にそう言い聞かせたのはキャサリンが十八になる頃のことで、それを見ても父親の判断が早計でなかったのがおわかりいただけると思う。この頃になるとキャサリンは、父親が驚くようなことなどとてもできそうに見えないばかりか、いったい、意外な出来事に驚くことさえあるのだろうかと人から思われるほど、反応の少ない、もの静かな娘になっていた。口の悪い人には、鈍い娘だとさえ言われた。しか

し、キャサリンの反応が少ないのは、痛々しいほど内気ではにかみ屋だったためであった。それが常にわかってもらえるとは限らないので、感受性が欠如しているという印象を人に与えることが時々あったが、ほんとうのキャサリンは、誰よりも優しい心の持ち主だった。

3

小さい時のキャサリンは、いかにも背が高くなりそうな様子だったが、十六歳で伸びが止まり、他のたいていの点と同じく、身長もごく普通、ということに落ちついた。けれどもキャサリンは、丈夫で均斉がとれ、健康にも大変にめぐまれていた。博士が冷静な達観者であるということは既に述べたが、もしもキャサリンが病弱であったとしたら、その達観はどうなっていたかわからなかっただろう。健康的な容姿こそがキャサリンの美しさであり、その晴れやかで生き生きとした顔色——色白の肌に赤みのさした血色は、実にほれぼれするほどだった。目は小さく穏やかで、顔の大きさに比べてやや大きめの目鼻立ち、長い茶色の髪はなめらかだった。手きびしくものを言う人ならば、キャサリンをぼんやりした不器量な娘と評したし、もっと想像力を持ち合わせた人ならば、しとやかでもの静かな娘と形容したが、どちらにしても、キャサリンのことをそれほど熱心に話題にしたわけではなかった。キャサリンは自分が一人前の婦人になったと自覚すると——そう自覚できるまでには時間がかかったのだが——突然、衣裳に熱烈なこだわりを見せ始めた。熱烈な、という形容がまさにふさわしい様子ではあったが、衣裳の趣味に問題がなかったわけではないので、むしろ、たいした趣味を持ち合わせてはいなかった、と述べるべきかもしれない。周囲を当惑させがちだったキャサリンのこだわりは、内気なために言葉で表現できないものを衣裳に語らせ、衣裳に表現させたいという願いのあらわれだったと言えよう。だが、着ているもので自分を表現したとしても、才気ある女性と思われなかったのはもっともだった。それに加えて、キャサリンが自由に使える金額は、もっと貧しい家の娘たちと比べても決して多くなかった。医師として得る、年に二万ドルの収入の半分を貯蓄している父親をもち、将来はひとかどの財産を継ぐ娘で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com